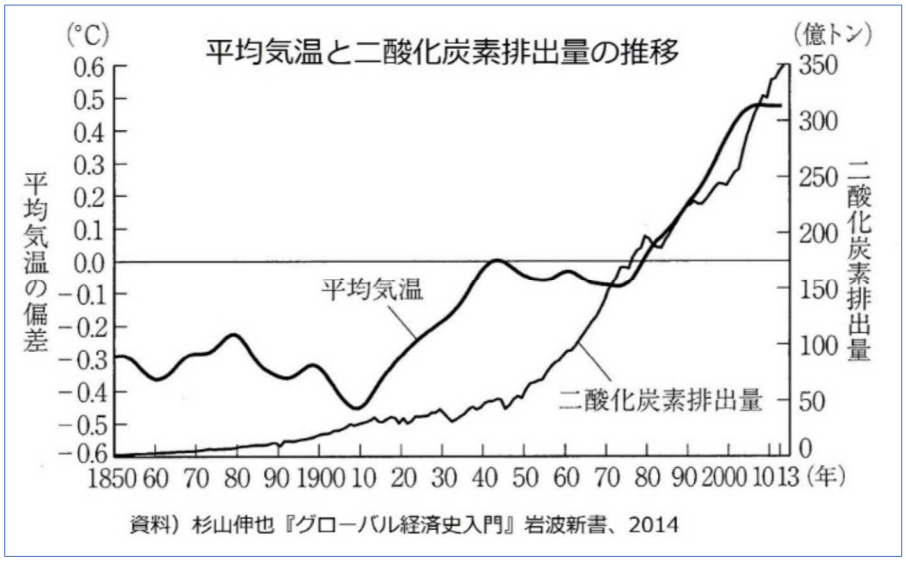
環境問題と予防原則

田中　史郎

環境問題や資源問題が耳目を集めるようになったのは、戦後の世界的な高度経済成長が終焉をむかえた頃で、D.H.メドウズ『成長の限界』や E.F.シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』が注目された。

昨今では、それが「地球の温暖化」の問題に絞られているように見える。人的活動の排出する CO2 は温室効果ガスであり、それが地球全体の温度上昇を招いているという論理だ。確かに、下図を見ると、1980 年代以降は CO2 排出量と気温の変化には相関が高いように見える。



しかし、この図を前提にしても、1980 年代以前は先の相関を主張することは出来ず、別の研究では、地球規模の年代における気温の変動については太陽活動の変化など諸説がある。また、C.D.キーリングの示す資料によれば、気温が先に変化することによって CO2 濃度に変動が見られる。要するに、気温上昇には人為的な CO2 排出が主因であるという説は、必ずしも説得的ではない。1980 年代から環境問題の研究で知られる「エントロピー学会」においてもそのような研究が多いようだ（例えば、矢吹哲夫「地球温暖化を巡る議論に関する物理学的な立場からの考察」『えんとろぴぃ』60 号、2007 年）。

では、どのような対応が求められるであろうか。そこで考えられるのが、予防原則という論理である。科学的真理に到達できず、ある説を支持できるかどうか保留するとしても、そのまま手をこまねいていて良いとは限らないという考え方だ。科学的真理やことの因果関係の研究に注目しつつ、予防原則の観点に立ち脱炭素化活動を支持することが求められるのではなかろうか。

（『センダードつうしん』第 6 号、2022 年 9 月）